

平成30年度の活動記録(11月)

第15回(11月5日) ◎大きな声で歌おう

「手話合唱ふるさと」の総練習しました



参加者数
対象者：26名
協力員：14名

- いよいよ相良区公民館まつりが「次の日曜日」まで迫ってきました。
- 手話合唱「故郷」の練習も今日が最後となりました。次に皆さんが集まるときは「本番」ですね。
- と、言うことで今日はタッパリ時間をかけて総練習となりました。
- もう皆さん「目をつぶって」も出来るようになったかな？
- 公民館まつり・・・楽しみですね。
- 公民館まつりが終わると、クリスマス・・・お正月・・・と、イベントが続きますね。 あ～忙しい、いそがしい。



大きな歌詞カードもできました



◎本日のおやつ



野菜たっぷり「温かうどん」



皆さん真剣です

第16回(11月19日) ◎むかしの遊びを楽しもう

久しぶりの「おじゃみ」でした

参加者数
対象者：25名
協力員：15名



♪あおぼしーげれる・さーくらのー



まずは「いきいきエブリーダー」



昔はお手玉三個は簡単でした



- 元来、お手玉はありふれた遊びとして親しまれ、母から娘、孫へと、作り方や遊び方が伝承されたものでした。しかし、1950年代ころから核家族化が進行するとともに(祖母から孫への)伝承が難しくなり、また、多種多様な遊びがまわりに溢れるようになり、徐々に忘れ去られてきました。残念なことですね。今日はホントに久しぶりに楽しみましたね。

◎本日のおやつ



野菜のカレー風味



今日も手話は「故郷」でした



足と手の運動 3・6・9・12

相良区公民館まつり特集 (展示・出店)

おかげさまで生き生きクラブは20歳になりました



活動記録、スナップ写真、制作作品などの展示コーナー



屋外テントでは「ビー玉脳トレ」と「冬瓜重さ当て」クイズを行いました



「ビー玉脳トレ」(ソリティア) やってます



ソリティアとは『ひとり遊び』という意味



重さ わかるかなー?



相良区公民館まつり特集 (芸能発表)

北 兜衣

手話合唱「故郷」のステージ



♪うさぎおいしかのやま〜
こぶなつりしかのかわ〜



市長さんも おいででしたね



生き生き仲間の角田さん

日舞は 堀八重子さん

お食事中のスナップショット



皆様お疲れ様でした



●鬼宿日

12月13日は「正月事始め」といい、「煤払い」「松迎え」などの正月の準備にとりかかる日とされています。12月13日は婚礼以外は万事に大吉とされる「鬼宿日」にあたることから、年神様を迎える準備を始めるのにふさわしい日とされ、「正月事始め」として定着していきました。

●煤払い

正月に年神様を迎えるために、1年の汚れを払い、清めることが「煤払い」です。江戸城で12月13日に煤払いをしていたことから、江戸庶民もそれにならって煤払いに精を出したそうです。

大店といわれる商家では、煤払いが終わると主人を胴上げし、祝宴を開いたといわれます。1年間の汚れを払い隅から隅まできれいにすると、年神様がたくさんのご利益を持って降りてくるといわれているので、煤払いも盛大で賑やかな暮らしの行事のひとつだったようです。

●松迎え

門松にする松やおせちを調理するための薪などを恵方の山へ12月13日に採りに行きました。これを「松迎え」といいます。

また、お歳暮をこの頃から贈るのは、お歳暮が正月用のお供えものだったことの名残りです。「煤払い」や「松迎え」が済み、年神様を迎える態勢が整う頃に届けるといわれています。

●年男

その年の干支にあたる男性を「年男」と呼びますが、もともとはお正月の行事を取り仕切る人のことを「年男」と呼びました。昔は家長が「年男」を務め、暮れの大掃除、お正月の飾りつけ、年神様への供え物、おせち料理を作るなど、お正月全般を取り仕切っていましたが、次第に長男や奉公人など、若い人が務めるようになりました。いまでは、お母さんが大活躍ですね。

我家は団扇で煤をはらひけり 小林一茶

東海道てくてく旅

相良区 区長 大石和美



4年前の初夏の朝、自宅～藤枝駅前間を旧駿遠線沿いに歩き始めたのをかわきりに、その1週間後、藤枝駅前～静岡駅間を、その後は主に週末を利用して、箱根～日本橋や名古屋～三条大橋などを1泊か2泊の行程を繰り返して東海道を歩きました。

当初は「昔の人は1日に40キロ位歩いていたので自分も」と気合を入れたこともありましたが、その後の経験から1日15キロ前後が自分に合った歩行距離と知りました。そして同時に肩の力を抜いてゆっくり、のんびり「てくてく」と歩いたほうがズツ楽しいことも悟りました。

そんなスローペースの道中ですので日本橋～京都を完歩出来たのは多分29～30回目で、延べ44～45日位を要した記憶があります。

そのおかげか、箱根峠ひとつ取ってみても、《峠の小田原側は防衛し易いように谷沿いの坂道、そして三島側は西国からの敵に備えて見通しの良い尾根上の道》といった他愛のないことかもしれませんが、箱根峠の本当の姿や隠された意味合いが見えてくるようなスローで楽しい旅を経験できました。

「三河黒松が300本ほど残る御油の松並木」「三河岡崎の27曲がり」「宮～桑名の7里の渡し」「鈴鹿の峠越え」「東海道と中山道の追分宿である草津」そして「三条大橋」と、決して便利ではなく、そして些細で素朴なことでも心身が癒されるところが、私にとっての「てくてく旅」の魅力であります。



箱根峠

相良でんぞら史話 六

《 蕉園渉筆 その二 》

大澤寺十五代住職 今井一光



代官として相良に赴任した小島蕉園は医者としてもあり民間に親しんでいったもののその善政の期間は3年余りでした。

文政6年1823年～文政9年(相良にて病没)と短い間のことでしたがその政(まつりごと)とは別に相良を中心に遠州各地での見聞と各伝承を記述することに励みました。それが「蕉園渉筆」(相良横町個人蔵)です。

中には奇談の如くのものや少々主観が入り過ぎているといったきらいがありますが、当時の相良とそれを取り巻く環境を知るに絶好の史料でもあります。

「蕉園渉筆」の内容をご紹介する前に小島蕉園が田沼失脚による「荒れる相良」に赴任するに至ったその選任の理由についてはかつての田安德川家甲斐での仕置きについて触れたいと思います。

「太枅騒動」と呼ばれる百姓一揆の鎮静化がそれでした。

当時年貢は過去3年7年10年などの収穫高を平均した定免法(凶作時は免除)という徴収方法が採用されているのが大勢でした。

それに対して世に云う悪代官なる者たちは「検見取」という各年収穫高に応じて徴収するという方法に変更し、尚且つ私利私欲の為に計量器としての「枅」の大きさを勝手に変更するなどの横暴が行われるようになったといわれそれが百姓一揆の発端となりました。当時代官というものは身一つで赴任し大八車一杯に荷物を積んで帰るなどの悪評が立ったほどです。

「検見取」は収穫高に応じて機械的に徴収する方法です。今風に言えば一見効率的に見えますが、管理はより厳密となり農業の生産性向上からすればマイナス。農民からは大いに不満を抱かせました。それに対して定免法は旧き日本の倣いでもあり農家にとっては前向きなヤル気を起こさせました。

徴収が一定と決まっていれば年貢除外分を備蓄のために努力を向けようと思うのが人情。それによって農閑期に山林を田畑に開墾するなど、年貢を支払った後の富の蓄積というものが計算できるのでした。将来に備えてです。

幕府からしても新地開墾は将来の年貢収納アップの期待があり、そこにはある意味「目こぼし」という寛容の精神がありました。

相良に於ける強訴や一揆頻発はその年貢徴収方法が検見取であったため小島蕉園は従前の定免法に戻して百姓の陳情を聞き、民意に配慮した政にあたって相良領民の落ち着きどころを探ったのでした。



お代官様 年貢でござーます



医師 小島蕉園 — 蕉園漫筆

小島蕉園が医者として執筆した物に「蕉園漫筆」があります。

医者であり、薬剤師でもある(当時の医者はほぼすべてそうでした)彼が当時の薬の事情やら同輩の医者の話あるいは医療関係書籍の書評などを書き綴った「医学随筆」であったそうです。

これからの いきいき予定

- 12月17日：クリスマス会
- 1月21日：お楽しみビンゴ大会
- 1月28日：ホールインワンを獲ろう



皆様のご意見や思い出話をお待ちしております

相・福 いきいきだより

笑顔がいいねっ!!

2018年12月3日号

(通算第57号)

発行

相良・福岡 生き生きクラブ